



from France



淑女の個性的な帽子は注目の的

老いも若きも楽しむ凱旋門賞

かつて英国の女王も馬主として臨席したという由緒ある競馬レースである凱旋門賞は、毎年10月の第1日曜日に、パリ南西部のロンシャン競馬場で開催されます。今年は10月5日、気温がぐっと下がって冷え込んだ曇天の下で催されました。

1920年の創設以来、パリの秋の風物詩となっている凱旋門賞ともなると人出も多く、人々はギャンブルというよりは緑の芝を駆け抜ける美しい競走馬を眺め、お祭り気分を楽しむために会場に出向きます。英国のアスコットレースなど、競馬の大レースの日には、欧州の淑女は華やかかつ個性的な帽子を競うように着用するというをご存じの方もいらっしゃるかも知れませんが、凱旋門賞でもそうした方があちこちにいて、観客の目を楽しませていました。

もっとも、着飾っている人しか会場に入れないかというと、全然そんなことはありません。むしろ観客の9割はカジュアルな服装です。小さな子供がいる家族連れも多く、子供たちはパドックにいる競走前の馬を

見て目を輝かせたり、場内の広いスペースで（競馬など関係なく）鬼ごっこをしたりして楽しんでいます。屋台で売っているハンバーガーやクレープを頬張るのも、子供たちには楽しみなようです。

さてこの日、注目の凱旋門賞は午後4時半から始まりました。レースは20頭で争われ、2分半ほどの間の勝負です。

今回で93回目となる同レースの歴史において、欧州以外の国の優勝はまだありません。このレースの制覇は日本競馬界の悲願だそうで、今年はハープスター、ジャスタウェイ、ゴールドシップという3頭が日本から参戦しました。結局、地元フランスのトレブという馬が昨年に続いて2連覇を達成し、日本競馬界の悲願達成は来年以降に持ち越しとなりましたが、賭ける賭けないや日本馬の勝敗はさておき、駆ける競争馬の美しさを堪能する一日でした。

(日本銀行パリ事務所)

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



地響きを立てて駆け抜ける馬たち



競走馬の入場にスタンドからは歓声が